

でんでら通信 第百四十五号 令和八年五月

坐禅会

五月三十一日(日) 十時より開催します。
みなさんのご参加お待ちしております。

連絡

七月五日(日) 八時 境内清掃
下村、川北、諏訪の檀家様、予定に入れておいて
ください

旅人の危機管理

岩手県大槌町で山火事が発生し、ようやく鎮圧となりました。しかしまだ鎮火には至っていません。(5月3日現在) 自然災害か人災かはわかりませんが、いつ何時災害はやってくるかわかりません。みなさんも「用心、用心」
仏教説話に古来より次のような話があります。

一人の旅人が山道を歩いていると、ふと、うしろに異様な物音がする。ふり返ってみると大きな虎が追っかけてくる。「こりや大変」と走り出した旅人は、「あ」と息を呑んだ。前は絶壁だった。

「もはやこれまでか!？」と諦めかけたとき、崖っぷちにある大樹に巻きついた藤つるが絶壁の下の方に伸びているのが眼にはいった。

「これはありがたい、天の恵み!」
その藤つるを伝って崖の中腹まで降り、ホンの一瞬の差で猛虎の餌食にならずに済んだ。

「ああ、助かった!」
と思ったのも束の間、藤つる握りしめた手が間もなく体の重みを支え切れなくなってきたことに気付いた。
「下に降りよう」

そう思っ下を見ると、とぐろを巻いた大蛇が口をあけて待っている。「こりや、いかん」

と、近くに足場を捜すと、足場はあるが、そこには四匹の毒蛇が、近寄らば噛みつかんばかりに赤い舌をペロペロ出している。ソツとして上を見ると、命の綱と頼む藤つるを、樹の根元のところで白と黒の鼠がガリガリかじっている。まさに絶体絶命。旅人はブルブルと身ぶるいつた。

その時、頭上二メートルほどの高さにある大枝にぶらさがった蜂の巣から蜂蜜がポトリと落ちて来て、偶然にも旅人の口にはいった。
「うまい!」

旅人はうっとりとして、絶望の現実を忘れたのであった。この話は何を物語るのか。山道を歩く旅人とは、起伏のある山道にも似た人生を歩む私たち人間の姿であります。いままでほんやりしていたが、ふと気付くと、うしろから猛虎が追っかけてくる。その虎とは何か。私たちが黙々と人生を走り続けるように、時間やライバルや仕事や金など、いつも何かに追われている姿です。

追われることは苦しいことですが、ときにそれを意識しないですむことがある。たとえば海外旅行に出たときなど、電話はかかってこないし、訪ねてくる人もなければ仕事からも開放される。それが藤つるにぶらさがっている東の間の旅人の姿でしょう。崖下には大蛇が、大口を開けてとぐろを巻いている。なんとか生きのびたい。生きの

びられそうな場合はある。しかしそこには四匹の毒蛇がいる。これは一切の物体を構成する地水火風の四大元素のことである。四大不調というように四大元素の不調和によって病苦があらわれるといわれるが、さらに、地震・洪水・火事・暴風ありで、たえず人間生命はおびやかされている。

藤つるは命、人間の寿命であり、その命を、黒白の二鼠、つまり夜と昼が絶え間なくむしばんでいる。

考えて見れば人間は上下四方、窮地の真つ只中に放り出されている。ところが人間、そんなに深刻な顔をしていない。それは落ちてくる蜂蜜のしたたりが、口にはいるからです。

蜂蜜は人間の欲のこと。仏教では財・色・食・名譽・睡眠の五欲があると教えている。うんと儲けて色気と食い気存分に楽しみ、苦勞せずには偉くなりたい。こうした欲があるからこそファイトも湧くのですが、欲のために道を踏みはずし、人生を台無しにする人も少なくありません。人間、生命の真の姿を直視することを忘れてはならず、日頃危機管理に備えるところがなくてはなりません。
生死事大 (しようじだい)
無常迅速 (むじょうじんそく)
各宜醒覚 (かくぎせいかく)
慎勿放逸 (しんもつほういつ)

生死の事は大なり、無常迅速なり。各宜しく醒覚して、慎んで放逸なること勿れ。人生はあつという間。各人しっかりと目を覚まして、寸陰を惜しんで努力精進すべきことをさとす言葉です。

仏説比喩経(ぶつせつひゆきょう)
お釈迦さまのたとえ話より